

津之香(つのかおり)

登録番号：第2890号	来歴：「清見」と「興津早生」の交雑
登録年月日：平成3年11月19日	実生
登録者：(独)農業・生物系特定産業技術研究機構	育成地：長崎県南高来郡口之津町乙
育成者：奥代直己 石内傳治 生山 巖 高原利雄 松本亮司 村田広野 浅田謙介 山本	((独)農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所(口之津))

特性

■栽培特性

樹勢は中程度で、樹姿は開張性である。枝梢は親品種である「清見」に似て、やや下垂する傾向がある。枝梢の太さ、節間長は中程度で、密生する。葉は「清見」に比べ小さく、やや波打つ形状を示す。栽培管理上問題となるとげの発生はない。

比較的早期から結実性が良く、群状に着果する傾向がある。豊産性であるが隔年結果性がみられるため、摘果を徹底する必要がある。

■果実特性

果実の大きさは160g程度、果形は扁円形で「清見」より扁平である。果皮色は橙色で「清見」より濃く、12月中旬には完全着色する。果面は「清見」に比べて平滑で、薄く美麗である。剥皮性は温州ミカンほどではないが、比較的容易である。また果皮と果肉は密着しており、浮皮の発生はない。じょうのう膜は薄く、果肉は橙色である。砂じょうが「清見」に比べしっかりしており、肉質は「清見」ほど柔軟ではないが多汁である。花粉を全く形成せず、また単為結果性が強いため通常無核であるが、他品種の受粉により少数の種子が形成されることがある。糖度は「清見」より高く、成熟期には13度程度となり、オレンジ様の香気を有し、食味良好である。クエン酸含量の減少は「清見」より遅く、成熟期は3月下旬以降となる晩生品種である。また、果実の貯蔵性は比較的良好である。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

そうか病に対しては強いが、かいよう病にはやや弱く「清見」程度と考えられ、「清見」に準じた防除で問題がない。害虫に対する一般的な防除は必要である。トリステザウイルスによるステムピッチングの発生は少なく、樹勢の低下、果実の小玉化等の問題はない。

枝梢の開張性が強いので、幼木期から結実開始期には樹形作りが重要となり、主枝が開きすぎないように支柱により主枝を支持する必要がある。特に結実管理には留意し、摘果の徹底、適正着果に努め、果実の重みで枝が開き樹冠の拡大を妨げることがないように注意する。また、本品種は「清見」や温州ミカン同様に大果になる程糖度が低下する傾向があるため、特性を発揮する適正な大きさに仕上げるのが重要で、大きくても180g程度までとしたい。

果実の耐寒性は比較強いと考えられ、冬の落果、低温による果皮障害の発生は比較的少ないが、遅くまでおきすぎると軽度のす上がりや果梗部の果皮の亀裂が発生するおそれがある。生理的なす上がりは「清見」より発生しやすいと考えられる。

■地域適応性

成熟期が3～4月と厳寒期を経過するため、晩生カンキツが樹上越冬できる温暖な地域での栽培が望ましい。低温障害の発生するおそれのある地域では防寒対策(袋掛け等)が必要となる。

(吉岡照高)